

ムスタン紀行

ジヨムソンよりチャランまで

仲 紀久郎

これよりは四輪駆動車と徒歩による旅なり。朝食後、飛行場近くのホテルより荷物擔ぎてジヨムソン市街のバス乗り場迄約十分間歩く。ジープに乗らんが爲なり。飛行場と町の間に川あり。木造の簡單なる橋は有れど車輛通行不可なり。又市街の道路細く凹凸激し。バス乗り場迄は徒歩或は驢馬にて移動せざるを得ず。

手配のジープ、未だ到着せず。氣温高からずと云へど、日差し強烈なり。佛教寺院の建物に日陰求めたり。日焼止めクリーム顔に擦り込めり。首の後にも塗るべき處、失念せり。翌日、首の後の皮見事に剝れたり。

餘程の時間を経たる後、ジープ到着。シートに穴開きベルト無し。外觀からも相當なる激務に耐へたる車輛と見ゆ。道路に鋪裝無し。乗車中は揺れ甚だしくペットボトルの水飲むも難し。

山道を暫く行くに河原に至れり。二三日前の雨にて増水あり。全員ジープより降り、運轉手のみにてジープ渡河せり。余等十餘名河原に用意されたるトラクターの荷臺に乗りて川を渡れり。激しく揺れたれど、無事渡河す。珍しく面白き經驗なり。

更に山道行けば、次なるは吊橋なり。之も車輛通行不可なれば、彼岸に別のジープ準備有らんとするに、荷物擔ぎて橋を渡れり。されど、吊橋は一本のみに非ず、徒歩數十分の所に更に別なる吊橋あり、ジープは其の對岸に用意しあるとの事なり。幸ひにして輕ライトバン一臺有り、其を借受け荷物積み込めり。バンは幾度もエンジン起こしつつも、辛うじて荷物運び^{をば}畢んぬ。

さて、二本の長き吊橋渡りて新たなるジープに乘れり。順調なる走行も束の間、崖崩れにてジープ通行不可となれり。雨降り始めたり。崖崩れたる箇所に向う側にてＵターン可能なる處に更に別のジープ手配す。其處まで約一時間半、高度約三千メートルの空氣薄き山道を雨中歩く事となれり。印度ヒマラヤのゴームクへ行く道に似たる故、ゴームク道と勝手に名付く。山崩れの場所、急流となれり。新調のゴアテックスの登山靴、水浸み通りけり。

ジープを乗換へる事四度に及ぶ。されど夜七時半にはチャランに到着せり。